

■ シベリウス／交響曲第 2 番 二長調 Op.43

ジャン・シベリウス（1865-1957）のオーケストラ作品といえば、最も親しまれているのが「フィンランディア」と交響曲第 2 番だろう。彼は常に祖国への愛に貫かれた作曲家だったが、同時にモーツァルトもびっくりするほど旅好きで、諸外国での活躍はコスモポリタンとしての性格を示している。

交響曲第 2 番はイタリアへの旅の最中、ラパッコの山荘において最初のアイデアを書きとめ、ローマで作曲を続けた。とくにイタリアの影響が現れているのは第 2 楽章テンポ・アンダンテ・マ・ルバートで、北欧人のシベリウスにとって絶えがたいほどの昼間の熱さが、そのころ聴いたばかりのモーツァルトの歌劇「ドン・ジョヴァンニ」を想起させたいらしい。コントラバスのピチカートやファゴットのメロディが、石像の客を思わせる。

全体は 4 つの楽章からできていて、第 1 楽章アレグレットは古典的なソナタ形式。ベートーヴェンやブラームスの影響を随所に伺わせている。第 2 楽章では途中から、まるで「フィンランディア」のような金管の楽想によって、劇的な効果もたらされる。後半の弦のメロディはスケッチ帖の中で「キリスト」と添え書きされている。第 3 楽章ヴィヴァチッシモはやはりベートーヴェン風のスケルツォ楽章。クライマックスののち、アタッカで続けて演奏される第 4 楽章アレグロ・モデラートは、第 1 楽章の主要主題を変形して用いている。自由なソナタ形式で、しだいに音楽は熱狂的になっていき、まるで古代の勝利の行進を再現したようなコーダで輝かしく終結する。

白石美雪

※掲載された曲目解説の無断転載、転写、複写を禁じます。

楽器編成：フルート 2、オーボエ 2、クラリネット 2、ファゴット 2、ホルン 4、トランペット 3、トロンボーン 3、チューバ、ティンパニ、弦五部 ※スコア上の表記